

研究アプローチ活動報告

KOBAYASHI, Fumiko / OGUCHI, Masashi / ABIKO, Shin / WANG, Min / KREINER, Josef / 小林, ふみ子 / クライナー, ヨーゼフ / 王, 敏 / 安孫子, 信 / 小口, 雅史

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

113

(終了ページ / End Page)

138

(発行年 / Year)

2015-01-30

研究アプローチ活動報告

研究アプローチ① 小林ふみ子 … 113

研究アプローチ② ヨーゼフ・クライナー … 119

研究アプローチ③ 王 敏 … 122

研究アプローチ④ 安孫子 信 … 126

電子図書館の構築 小口 雅史 … 134

研究アプローチ①「<日本意識>の変遷—古代から近世へ」

アプローチ・リーダー：小林 ふみ子

研究アプローチ①「<日本意識>の変遷—古代から近世へ」では、2013年度にシンポジウム1回、研究会を2回、ワークショップを3回開催した。

2013年9月21日（土）に開催したシンポジウムは、「メディアと日本意識—批判とは何かを、若い世代が考える—」と題して、現代日本の課題からみる<日本意識>の諸問題について多角的に検討した。実際に社会課題について活動のなかから考察を重ねる、佐藤東洋氏（近代日本思想史研究家）、李知蓮氏（法政大学大学院生）、川崎那恵氏（大学職員）、三浦友幸氏（シャンティ国際ボランティア会）の4氏のパネリストを迎え、本アプローチ・リーダー田中優子とともに雑誌『週刊金曜日』編集者野中大樹氏を司会に据えた、きわめて現代的な視点からの議論となった。民主制、差別、地方と中央、人間関係の希薄化といったさまざまな次元にわたる今日的な問題の現状と要因、その課題を論じるなかで、アイデンティティの置きどころの問題としてのナショナルか、ローカルかということ、そこにネイティブ（出自）の認識がどう関わるのかということが、流動的な差別・被差別との関係性、地域とその状況に応じて、今日いっそう複雑な様相を呈していることが明らかとなるとともに、それが日本固有の問題系ではなく普遍的な課題であることが指摘された。

研究会2回は、いずれも前年までに課題となった、<日本意識>と夫婦ないし男女の和合の関係についての検討を行った。

第1回は2013年7月20日（土）に開催し、渡辺浩氏（法政大学）による「『夫婦有別』と『夫婦なかよく』—清朝中国と徳川日本」と題する報告であった。従来、儒教的な観念に基づくものとして理解されてきた教育勅語の一節「夫婦相和シ」は、実は夫婦であっても男女間に「別有り」と説く儒教道徳に背くものであると指摘し、その要因を日本の慣習においては男女の「別」が比較的緩やかであったこと、家業の体系によって成り立つ社会において「イエ」を支える基盤としての夫婦が重視されたという背景が論じられた。そこに家を

支えるものとして夫婦や男女の和合を尊ぶ慣習が日本にあることは事実だが、しかしそれが日本的なものだと認識されていたかどうかについては議論の余地があることも明らかになった。

第2回は2013年12月20日(金)に開催し、出口弘氏(東京工業大学)による「地獄草紙のカリカチュアとしての勝絵」と題する報告であった。『鳥獣戯画』と同様、鳥羽僧正覚猷を作者とするという伝説に彩られた「勝絵」と呼ばれる滑稽画が存在すること、陽物くらべと放屁合戦を描くその図が、院政期から明治初期まで転写され続けて多くの絵巻群を生んできたことが紹介された。それを系統化しつつ、裸体の人びとを滑稽に描くそれらの絵は、本質的に仏教思想の教化のために作られた『地獄草紙』『餓鬼草紙』のパロディであることが指摘され、それうえてそれが享受され続けたことの意味について考えた。日本における性の表現をめぐる文化史の重要な一端として古い時代から笑いの要素があることをあらためて確認させつつ、一方でそのことが〈日本〉という枠組みの認識にどう関わるのかについては課題として残された。

3回実施したワークショップのうち2回は、2012年度に実施した東北からみる日本を考える「みちのくワークショップ」古代中世・近世編の続編としての近代編であり、1回は本アプローチの研究の総まとめに向けた研究成果の共有と深化のための2日間にわたる討論であった。

「みちのくワークショップ」近代編第1回は2013年10月25日(金)に開催し、「稲作ナショナリズム—日本近代の自己意識」と題する山内明美(大正大学)の報告を受けて議論した。「日本人の主食」として一般的に認識されている米が、実は明治の末年に至るまで必ずしもそうとはいえない状況があり、その後の需要の急増とともに政策的に東北がその供給源となされ、東北は国内にありながらもいわば植民地化されていくこと、また米の象徴的意義が、その生産や輸入をめぐる国策の変遷、大正期の米騒動に端的に表れたように、むしろ近代に至って特異な色彩を帯びるようになったことが明らかになった。

「みちのくワークショップ」近代編第2回は2013年11月15日(金)に行われ、河西英通氏(広島大学)による「近代東北が見た〈日本〉」の報告をめぐって討論した。近代以降、自由民権運動時代の東北人を主体とする「第二維新論」

をはじめとして、東北人による東北の振興が昭和に至るまでさまざまなかたちで唱えられてきたことが、その系譜をたどりながら指摘された。また東北人が自らを蝦夷やアイヌと一体視するのか、大和民族の側に同一性を求めるのかによって異なる〈日本〉像が描かれること、戦中に「純日本」などとして〈日本〉と〈東北〉が一体視される時期があり、戦後、植民地を失った日本にとっての、資源供給地という意味で重視され、国内植民地化されていく過程が浮かびあがらせた。

以上、2回に分かれた「みちのくワークショップ」近代編において、近代に入りますます周縁化されながらも、中央に食料や労働力、エネルギーを供給して奉仕させられ、日本を支える存在と位置づけられていく過程が確認された。

2014年3月15・16日（土・日）の両日には、最終年度を迎えるにあたって、アプローチ（1）の研究のまとめにむけたワークショップ「和の国？武の国？神の国！—江戸から見る日本人の自国認識の変容」を開催した。

初日のセッション【1】は「『自国』を誰が／どの範囲で捉えるか」として「自国」認識にまつわる基本的課題を共有した。はじめに、アプローチ・リーダーの田中優子が、領域、対外意識、危機と国難、華夷秩序と都鄙構造、裏と表といった観点からこの研究の見通しを示し、その今日的意義を論じた。続いて、米家志乃布氏（法政大学）による「人びとにとっての近世日本のかたち」では出版図を中心に検討を行い、江戸と上方で普及した地図の精度の差、また大黒屋光太夫の日本図を例に節用集などの日用書類の影響力の大きさなどの興味深い論点が指摘された。アプローチ・メンバーの横山泰子は、アイデンティティ・帰属意識と国との距離感の多様性を論じる旧稿「ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ？」を紹介するとともに、「怪物ではない〈日本の私〉—『和漢三才図会』の外夷人物をめぐって」と題して、東アジア漢字文化圏の外に広がる「外夷」を他者として、その内側の文明に帰属する、奇異でない「自分たち」という自己認識のあり方を指摘した。大木康氏（東京大学）の「華夷意識が無限に作り出す「夷」の存在」は、中国において確立された華夷意識のもともとのあり方について確認したのち、そういう認識の相対性とそこにおける日本の位置、それが国内においても都鄙構造のなかで連

鎖する関係についても論じた。中国を専門とする大木氏との質疑においては、「神州」としての自国認識は中国にもあること、また日本刀など武器への美術工芸品的関心に、東アジアでいえば日本の特異性がある可能性の指摘などもあり、今後のさらなる課題として残された。

セッション【II】は「〈周縁〉を／からみる」として、「みちのく」と琉球からの視線、それらと日本認識の問題を考察した。津田真弓氏（慶應義塾大学）の「「みちのく」からのまなざし」では、外国船来航などによって対外的な危機意識の高まる19世紀初頭に仙台藩で作られた新作能『神皇』を素材として、その時代に日本と仙台藩を二重写しにして造型する意識について考察が加えられた。ヤナ・ウルバノヴァー氏（法政大学大学院生）の「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」では、17世紀諸島の薩摩侵攻以前の琉球の歌謡オモロとそれ以後の琉歌において「大和」の描かれ方に顕著な相違が見られることが明らかにされた。内原英聡氏（本研究所客員学術研究員）の「近世琉球人は日本をどう見たか」では、近世琉球の人びとの身分階層、立場、琉球王府との距離などさまざまな要因によって見え方が異なるという問題の複雑性が指摘された。アプローチ・メンバーの小林ふみ子「「支え」にされた琉球」では、琉球が、従来指摘されてきたように政治レベルで日本型華夷意識を支える朝貢国と位置づけられてその行列が民衆への示威に利用されただけでなく、それを受け止める人びとの側でも「日本に憧れる琉球」の物語として享受されたことを論じた。

2日目のセッション【III】は「「和」の国・「武」の国イメージの普及」。アプローチ・メンバーの竹内晶子の「謡が広めた豊かで平穏な国のイメージ」では、世阿弥の「幽玄」において日本的であることがいかに重要であったかということと、そこで行われた平穏な国としての表現が近世日本に大きな影響力をもったことが論じられた。小林ふみ子「「和」らかな色好み＝好色の国」では、「和国」という表記が「色好み」の王朝文学の古典化と結びついて好色を国風とする近世中期以降の通俗神道の言説が説得力をもつに至ったことを提示した。また韓京子氏（慶熙大学校）の「浄瑠璃による「武国」イメージの流布」では、対外関係を意識したときに近世前期のある時点までは「知恵の国」という表現が先に立っていたところに、徐々に神功皇后や三種の神器のうち

の剣の威力の逸話などによって「武国」イメージが強化されたことを指摘した。さらに金時徳氏（ソウル大学校）による「異国戦記と武国日本の可視化」では、いわゆる朝鮮軍記物の系譜に連なる作品群を例として、とくに19世紀に入って挿絵の戦闘場面の増加と血生臭さの強調が顕著になることを具体的に提示した。大屋多詠子氏（青山学院大学）「曲亭馬琴の日本魂と「武の国」」では、馬琴作品における「日本魂」の用例を検証して忠孝との関連を確認したうえで、漢を排斥する国学者とは異なって儒仏一致の思想のうえにたって双方を肯定し、武国日本の、文国中国からの文明移入を儒仏肯定に援用したと論じた。このセッションの議論では一見相反するかのような平穏な「和の国」イメージと、武士の武威によって統治される「武の国」言説が、武による和の実現という文脈でつながっていくことが確認されたことも重要であった。

セッション【IV】「神の国」—近代をつくった自国認識の登場」では、まず林久美子氏（京都橋大学）による「浄瑠璃による神国意識の普及」では、近松門左衛門以前の古浄瑠璃の時代からみられる記紀神話に取材した演目の数々は、金平浄瑠璃と同様に、当時の観客の嗜好を意識したものだと考えられることを指摘し、そこに間接的に山崎闇齋の垂加神道の影響力が見られることを論じた。福田安典氏（日本女子大学）の「平賀源内と「神国」」では、源内が士分にある者として表向きは林家の思想に立ちながら、谷川士清に私淑して日本神話と古代中国の伝説の習合を否定する、国学的な考えをもっていたことを指摘した。川添裕氏（横浜国立大学）の「開国期の神さまと異国形象」では、当時の不安な心性のネガとして異形の異国人物の見世物がもてはやされたこと、そこでは異国の具体的な軍事的脅威という圧倒的な非対称の関係に対して、いわば異次元の、想念のレベルで「神の国」として対抗し、その非対称を解消しようとする意識を提示した。横山泰子氏の「国難と神国思想」では、自然災害を「神軍（かみいくさ）」として捉える思想を指摘、かつての蒙古襲来の記憶「ムクリコクリ」という名で恐ろしいイメージとして残ったこと、安政のコレラ流行が対外的な危機と結びつけられて理解され、それに対応して単数の神ではなく、あらゆる神々がいわば総動員されたことを鑑み、神国思想は単数の「神の国」ではなく「神々の国」という理解が一般的であったことが論じられた。このセッションでは、神国思想を単純に神道や国学の

枠で理解するだけでなく、儒学や仏教、民俗信仰との関係のなかで検討し直す必要、また時期による変容を考える必要が浮かびあがった。

全体討論のなかでは、上記に加え、地域性をどう考えるかということが課題として指摘された。東北の問題だけではなく、とくに上方では、幕府との距離感や出版業のありかたなど江戸とは違った認識が見られるはずだとして、今後追求すべき課題として残された。

ワークショップにおける各氏の報告とそれを承けた討論の成果は、『日本人は日本をどうみてきたか—江戸からみる自意識の変容』として書籍化され、2015年3月に刊行する予定である。

アプローチ・リーダーは、2013年度まで田中優子が務めたが、2014年度からの総長就任にともなって小林ふみ子に交代することとなった。

研究アプローチ②

「近代の<日本意識>の成立－日本民俗学・民族学の問題」

アプローチ・リーダー：ヨーゼフ・クライナー

アプローチ②「近代の<日本意識>の成立－日本民俗学・民族学の問題」では、2013年10月18日（金）から20日（日）の3日間にわたり、国際シンポジウム「日本とはなにかー日本民族学の20世紀―鳥居・澁澤・梅棹・佐々木」を法政大学九段校舎3階第一会議室で開催した。今回は日本国内と韓国及びドイツを含む研究者15名の発表があり、一般参加者167名の聴講があった。

われわれは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に「国際日本学の方法に基づく<日本意識>の再検討－<日本意識>の過去・現在・未来」が採択されるのに先立つ段階で、大森貝塚の発掘を行った小シーボルトと日本民族学・考古学の黎明、また、柳田國男の『後狩詞記』の民俗学の草分け的評価について国際シンポジウムを開催し、その成果は二冊の報告書にまとめられた。

プロジェクト採択当初の2年目の2011年度までは、昭和10年代から20年代にかけての時期に絞って民俗学と民族学の両みんぞく学のパラダイムの変化を討論してきた。この時期の日本は、戦前の大日本帝国及び植民地国家から戦後の単一民族国家へと変わった。この歴史的なプロセスで両みんぞく学のパラダイムがどのように変化してきたのか、また、「日本」という意識はどう変化したのかという重大な研究課題を検討し、その研究成果を報告書『近代<日本意識>の成立』として刊行することができた。

プロジェクト3年目となる2012年度には、日本民族学の生みの親ともいわれる岡正雄の業績を取り上げ、いくつかの研究会、国際シンポジウムで討論した。この研究では、両みんぞく学だけではなく、考古学、言語学、社会人類学といった隣接諸分野も取り上げ、報告書『日本民族学の戦前と戦後―岡正雄と日本民族学の草分け』にまとめられた。

2013年度のシンポジウムでは、20世紀の民族学ないし文化人類学の発展と最も深い関わりがある四人の先駆者の業績を取り上げて討論した。その際、韓国の研究者の最近の調査・研究成果にも注目し、自然人類学者の金関丈夫も

視野に入れた。

シンポジウムの概要は以下の通りであった。

鳥居龍蔵（1870-1953）は、生涯を通じてアジア中心に幅広い実地調査を行った研究者として知られている。北は千島アイヌ、樺太、シベリア東部、南は台湾、西南中国、田代安定、伊波普猷と接触しながら沖縄を、そして1905年以降は幾度にもわたり朝鮮半島、満州、中国北部の河北の調査を重ねた。特に考古学、宗教、神話の面において日本との比較を行った。鳥居の重大な成果は、日本文化は少なくとも南と北の二つの影響を受けて成立したという見解であった。岡正雄は、鳥居から比較の手法、考古学の成果を文献と照合する方法を受け継いだのではないかとみられる。

次に取り上げた澁澤敬三（1896-1963）は、日本の近代化に大きく貢献した澁澤栄一の孫として、また経済界の指導者および実業家として大きな業績を残している。しかし、民俗学、民族学の研究分野でも大きく活躍したことも見逃すことはできない。澁澤の残した業績の中でも特に重要な点は二つある。一点目は、文字を中心とした文献学的研究にモノという新しいカードを入れた、日本の物質文化の研究の開拓者であったことで、アチックミュージアムで収集した民具は後に民族学協会附属博物館（保谷）を経て国立民族学博物館の基礎となっている。すなわち、澁澤は現在、諸外国で行われている日本研究のパラダイムシフト、ビジュアルターンの50年、60年前の先駆けであった。二点目は、澁澤が学際的ないし共同研究の重要性を常に強調したことである。その点で、日本民族学会の設立と同時に人類学会との連合大会の開催を進め、戦後には九学会連合を設立し、その調査と研究に深く関わってきた。こういった日本の動向は、外国で行われていた日本研究においても注目を集めた。ウィーン大学が組織した阿蘇地方の学際的共同研究はその好例の一つである。

梅棹忠夫（1920-2010）は、非常に細かい実地調査のフィールド・ノートを残した研究者として知られているが、日本文明を新しい観点から見つめ、西洋と比較した大きなビジョンを展開した代表的な日本の研究者である。この文明学の確立と発展のために、昭和32年に発表した「文明の生態史観序説」という基礎的な意味をもつ論文以降、主に昭和58年から17回にわたって国立民族学博物館で開催した谷口国際シンポジウムの文明学部門の席で、アメリカ、

ヨーロッパをはじめアジア、オーストラリアの研究者と一緒に討論した。また、国立民族学博物館の設立者・初代館長としての業績も忘れることはできない。

金関丈夫（1897-1983）は自然人類学者であり、戦前は台北帝国大学で活躍し、雑誌『民俗台湾』の紙面上で大東亜民俗学の可能性を展開した。これを取り上げ、法政大学の川村湊をはじめ、最近20年にわたって厳しい金関批判が行われた。それに対して、ソウル国立大学校の全京秀は、当時の学問がおかれていた厳しい状態を指摘し、むしろ金関の努力を認めるべきだと強調した。

佐々木高明（1929-2013）は京都出身の地理学者で、焼畑農業の比較研究で日本国内をはじめ、中国、東南アジア、インドなど広い地域において細かく調査を重ね、その成果として植物学者の中尾佐助と一緒に「照葉樹林文化」を日本文化の源流とした学説を打ち出した。これは現在でも定説で、主に考古学の世界で調査・研究が進められている。また、南からの日本文化と同じように、北のほうからの「ナラ林文化」が影響した可能性も視野に入れ、アイヌ文化研究と接触し始めた。

このシンポジウムの数々の重要な発表と討論を簡単にまとめると、日本文化の多元的起源の学説の流れ（鳥居、岡、金関、佐々木）に対して、日本文化を一元的なものとして取り扱ってきた学説（柳田國男、石田英一郎、全く違った観点から梅棹）の二つの学説の流れを、20世紀を通じて出された「日本意識の形成」という問いかけに答えるパラダイムとしてみなければならないという結論に至った。

なお、シンポジウムでの発表と討論についてまとめた報告書は、2014年3月に『日本とはなにか 日本民族学の二〇世紀』と題して東京堂出版より刊行された。

研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在－東アジアから」

アプローチ・リーダー：王 敏

研究目的（2010-2013年度）：

アプローチ③は、これまで法政大学国際日本学研究所の中国、東アジアにおける日本研究チームが長年取り組んできた「国際日本学研究」の一環である「異文化としての日本研究」の確立とその方法論を活用した、時代の変化に応答できる「異文化・外部」の視点を取り入れた総合的日本研究という主旨を引き継ぎ、これまでの研究姿勢と成果を発揮させていく方向に位置づけられている。

研究対象は同じ日本ではあるが、異なる文化背景にある東アジア諸国の日本研究のありかたがそれぞれの価値基準によって独自に展開されている。異なる文化背景におかれている日本意識およびその変容への研究を媒介とし、相互の再発見と、研鑽、学術発展を目指している。また、地域性を反映させるおのこの研究成果から、建設的思考を抽出し、東アジアに、日中両国にとっても有用な参考ケースを提供させたい。なお、日本または一地域中心の「日本意識」を越えて、自他再認識、再発展のための「日本意識」を再検討し、互いに「参照枠」となる啓発型の研究活動を志向するものである。

急速に変化する中国社会を重点に東アジアを研究範囲にし、「日本意識」の現在に関する研究調査・分析を行う。他方、「日本意識」と表裏一体関係でもある諸外国の自己認識と、相対的に比較確認を重ね、互いの参照枠となる相互研究の姿勢を意識しながら、研究会の開設などの交流活動も併せて進める。

「日本意識」に内在する建設的価値を再確認しつつ日中、東アジアへの平和構築に広く活用できる「応用」型研究と交流型研究を意識的に取り組み、模索して行く。

なお、研究成果を意識的に発信し、社会貢献、平和貢献にも連結されるよう、模索していく。

2013年度は2012年の研究活動を継続的に検証しながら、従来、触れられていない日本留学経験者の日本観及びその形成過程を整理し、分析、記録する活動をし、「日本意識」を考察する代表的事例研究とした。

①研究活動

- ・ 法政大学清国留学生法政速成科（1903～1908）をめぐる教育、その他の事情調査を行いつつ、国際日本学専攻の院生の論文テーマとなる指導をして、関連する研究成果を社会、教育現場に反映させるよう、実践をする。
- ・ 上記の院生指導の成果も含めて国内外に発信する。
- ・ 従来の研究活動を継続する傍ら、東アジア文化研究会を10回、共催による国際研究会議を1回の開催を果たした。

法政大学国際日本学研究所 2013年度東アジア文化研究会、シンポジウム一覧

於：法政大学市ヶ谷キャンパス

日 程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第1回 2013.4.10（水）	大脇良夫 日本と中国の禹王遺跡行脚研究家	禹王を巡る日中の文化交流
第2回 2013.5.29（水）	上垣外憲一 大妻女子大学教授	勝海舟の中国観
第3回 2013.6.26（水）	沈国威 関西大学外国語学部教授	近代東アジアの文脈における日本語：中国人日本語学習史からの視点
第4回 2013.7.9（火）	黄俊傑 国立台湾大学人文社会研究院院長、 教育部国家講座教授	「東アジアから考える」はいかにして可能か？——日中思想交流経験を中心として
第5回 2013.9.25（水）	廖亦陽 武蔵野美術大学・教授	戦前の日本における美術教育と中国留学生——傅抱石書簡を中心として
●国際研究会議 2013.10.19～20 （土～日）	日中両国の研究者および院生 四川外国語大学2013年度国際シン ポジウムへの協力として、中国・四 川外国語大学内で開催	文化の越境と他者の表象
第6回 2013.10.30（水）	藤田梨那 国士舘大学文学部教授	孫が語る「郭沫若と日本」——その異国体験の意味
第7回 2013.11.22（金）	竹内理樺 同志社大学グローバル地域文化学部助教	何香凝と日本留学——革命への関わりと美術との出会い
第8回 2013.12.18（水）	曹応旺 中共中央文献研究室研究員	周恩来の中日関係観
第9回 2014.1.22（水）	古俣達郎 法政大学史センター専門嘱託	法政速成科のメタヒストリー——梅謙次郎・汪兆銘・周恩来
第10回 2014.2.26（水）	大戸安弘 横浜国立大学教授	日本古代・中世の教育と仏教

②研究成果

(1) 教育活動

研究成果を反映させる院生の論文が高く評価され、院生三名が2013年3月24日に修士号を取得した。

- ・ 蘭一博「漢文月刊雑誌『東洋』に関する一考察」
 - ・ 蔡希蕙「兆銘の日本留学期間における勉学状況に関する一考察」
 - ・ 周曙光「日本滞在時期における章士釗——その活動を中心に」(2013年4月より法政大学大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート博士課程に進学)
- 2014年3月、さらに修士号一名を送り出した。
- ・ 胡曉菲「刀安仁と日本——日本留学時期を中心に」

また、法政大学国際交流センター、日本国際交流基金の招聘研究者各位一名、中国教育部の研究支援基金による派遣若手研究者三名を受け入れ、研究の指導を担当した。

(2) 2013年度の主な研究成果

- ・ 『辛亥革命と世界』(王曉秋編、北京大学出版社、2013年8月)
- ・ 『東アジアの中の日本文化』(三和書籍、2013年9月)
- ・ 『作為区域研究的日本学(地域研究としての日本学)上』(楊偉編、重慶出版社、2013年9月)
- ・ 『作為区域研究的日本学(地域研究としての日本学)下』(楊偉編、重慶出版社、2013年9月)
- ・ 『日本学研究の基層』(徐興慶、太田登編、台大出版中心、2013年10月)
- ・ 『中華書局与中国近現代文化(中華書局と中国の近現代文化)』(上海人民出版社、2013年10月)

(3) 2013年度における本研究の到達点

冒頭の繰り返しは避けるが、本研究に与えられているテーマは東アジア地域、とくに中国の日本意識の現在を映し出すことにある。だが、日本一国を

中心に「日本意識」を単独に抽出しても一極的研究となり、結果的に不完全な日本意識となる恐れがあり、客観性を欠くことが明らかと思われる。即ち、日本意識そのものを相対に位置づけられる参照枠が前提にされなければ、日本意識を浮きぼりにする土台がなくなり、日本を対象にする課題設定が孤立無援の存在となり、独善的な主観評価になってしまう。

東アジアとの相互認識を映し出す過程がなければならない。日本意識の共有が可能になるためには、内外にとっても相互の参照枠と位置づけられる日本意識の定義を明確化し、異なる地域間の交流という大前提が不可欠である。

本まとめの内容が以上の構想に沿って、日本意識について過去の事例を検証し、現在および今後の参考になるべき啓示に関する提示を念頭に、日本意識および他者認識の相関関係をベースにすることをアプローチの条件とする。

ともあれ、日本と東アジア、お互いの参照枠となり、相互学習、相互発展の「古層」からスタートして現在に進められ、未来へ共に翔けていくしかないと推察されよう。

研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

アプローチ・リーダー：安孫子 信

研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」は、2013年度に国際シンポジウムを1回、勉強会を4回開催した。

1. シンポジウムおよび勉強会の開催実績

2013年度に開催したシンポジウム、勉強会、研究会の一覧を下記に示す。

(1) シンポジウム

■ 2013年アルザスシンポジウム「日本のアイデンティティとアジア」

開催日：2013年11月1日（金）～11月3日（日）

主催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学センター東アジア文明研究所、ストラスブール大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所

会場：アルザス欧州日本学研究所

(2) 勉強会

■ 第1回勉強会

開催日時：2013年5月30日（木）18：30～20：30

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：ジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン氏（フランス・ニース大学ソフィア・アンティポリス名誉教授）

論題：科学は普遍的吗？

司会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■ 第2回勉強会

日時：2013年12月16日（月）18：30～20：30

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：ジャサント・トランプレー（北海道大学文学部客員研究員）

論 題：西田に於ける包含の論理の図式的説明

司 会：安孫信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■第3回勉強会

日 時：2014年2月28日（金）15：00～17：00

会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：ガブリエル・デカマス（九州大学国際教育センター講師）

論 題：近現代芸術における芸術と科学との相互作用について

司 会：安孫子信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

■第4回勉強会

日 時：2014年3月22日（土）16：30～19：30

会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階国際日本学研究所セミナー室

報告者：エルダル・キュチュキュアルチュン（ボアジチ大学・アジア学研究所助教）、オウズ・バイカラ（ボアジチ大学文理学部翻訳通訳学科准教授）

論 題：トルコにおける日本学

司 会：小口雅史（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

2. 2012年アルザスシンポジウム「日本のアイデンティティとアジア」

2.1 シンポジウムの概要

2005年に前身である「日本学とは何かーヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究」が行われて以来、年1回ずつ行われている国際日本学シンポジウムも、今回で9回目を迎えた。今回の総合テーマは「日本のアイデンティティとアジア」であり、日本側と欧州側の研究者18人による報告と討議が行われた。

各報告の概要は以下の通りであった。

- (1) アンドレ・クライン（アルザス欧州日本学研究所 [フランス]）／ヨーロッパ、または日本・アジアにおける20世紀の戦争と和平
第一次世界大戦と第二次世界大戦に象徴される深刻な対立を経験した欧州

が、クーデンホーフ・カレルギーらの努力によって現在の欧州連合へと発展した歴史を踏まえ、文化的に共通する要素を有しながら内部での対立を抱えるアジア、とりわけ東アジアが、「ヨーロッパの和解」とはまた別の和解を生み出すことができるかが、今日、世界全体にとっても重要な課題であることが指摘された。そして、そのことでの貢献においてこそ、日本のアイデンティティが測られるであろう、ということが示唆された。

- (2) 湯重南 (中国社会科学院 [中国]、代読：井上亘) / 一个中国学者对“日本身份与亚洲”的认识

「日本の民族文化の形成と東アジア」、「近代における日本の民族文化の発展と東アジア」、「日本の民族文化に対する理解」を通して、日本の文化がどのように形成されたのか、日本の文化が近代において東アジアにどのような影響を与えたのか、また、文化の独自性はいかに評価されるのかが考察された。近代日本が中国に与えた大きな影響も公平に評価した上で、それでも文化はそれぞれが特殊なのであり、日本文化のみに「独自性」や「優越性」を言うことは不適切であることが主張された。

- (3) フィリップ・ペルティエ (リュミエール・リヨン第2大学 [フランス]) / 極東もしくは日本の中のアジア—メタ地理概念の創生

マテオ・リッチによってもたらされた世界地図が中国を経て日本に移入され、どのように受容され、自国化されたかが語られ、さらにそれと同時に、「亜細亜」、「東亜」、「極東」といったヨーロッパ産の地理概念が、時々地政学的観点から、むしろ積極的に日本によって用いられていったことが、メタ地理学的手法によって示された。

- (4) サミュエル・ゲー (ジュネーブ大学 [スイス]) / 「東洋」から「北東アジア」へ—日本のアジアへの復帰にむけて？

日本における「アジア」と「東洋」の概念の位置付けの変化を手掛かりに、「近代化された日本」と「発達途上の東洋」という20世紀初頭に生まれた考えが、日本を含まない「東洋」、日本を含む「東アジア」、さらにいずれの国も周辺となり中心の位置を占めない「北東アジア」という考えへと変化することが確認された。

- (5) カリーヌ・マランジャン (ロシア科学アカデミー東洋写本研究所 [ロシア])

／アジアにおける日本の役割—ソ連とロシアの解釈

ソ連時代とロシア誕生後の日本研究の特徴を概観し、前者においては通時的、歴史的研究が主で、中国文明の強い影響を認めつつ歴史と文学においては「極東」の文脈で日本が捉えられ、また後者では、共時的、同時代的研究が中心となり、政治的、経済的状況、世界とアジアにおける役割、アイデンティティが日本研究の課題となっていることが示された。

- (6) 鈴木裕輔（法政大学 [日本]）／「日本はアジアの盟主ではない」—石橋湛山による日本の対外拡張主義の批判と中国に対する理解

石橋湛山が経済専門誌『東洋経済新報』で行った日本の対外拡張主義に対する批判を、石橋の中国に対する理解、1910年代から1930年代にかけての国際社会における日本の立場、そして日本の外交政策に対する石橋の評価の3点から検討し、それが日本を、世界そしてアジアに対して、きわめてふさわしく位置づけるものであったことを示した。

- (7) 川田順造（法政大学／神奈川大学 [日本]、代読：星野勉）／いま福沢諭吉の脱亜論を読み返す

福沢諭吉の「脱亜論」がどのような自国と他国の理解に由来するものであったのか、そこで「脱亜」の後に目指されたものは何だったのかを検証し、この論が、西洋の進歩観を無批判に受け入れ、明治維新を「成功物語」とみなすことから生じており、その「成功物語」のさらなる追求を外に目指すものであったことを明らかにした。そのような「成功物語」に流されないために必要なこととして示されたのは、福沢自身によっても示唆されている、国家と区別される国民の立場である。

- (8) ヨーゼフ・クライナー（法政大学 [日本]）／日本民族文化の形成におけるアジア諸民族文化との関わり合い—20世紀における日本民族学・考古学の学説を振り返って—

エドワード・モースとヘンリー・フォン・シーボルトによる大森貝塚の発掘に始まる日本の民族学と考古学の歴史を、坪井正五郎、鳥居龍蔵、柳田國男、岡正雄、鈴木尚、金関丈夫、江上波夫、石田英一郎、梅棹忠夫、佐々木高明の日本民族の文化の形成に関する学説を辿りながら検討した。

- (9) アリス・ベルトン（フランス国立東洋言語文化研究所 [フランス]）／国

立民族学博物館と国立歴史民俗博物館で日本を展示する：そこでアジアはどう位置づけられているか

1977年に開館した国立民族学博物館と1983年に開館した国立歴史民俗博物館を対象に、日本の文化的アイデンティティを扱うことを目的とする国立の施設である両館の、自国の歴史を他国との交流の中に位置付ける仕方の違いがどのようなものかを検討した。

- (10) 大貫恵美子 (ウイスコンシン大学 [米国]) / 米食・水田はアジア人に共通：アジア人としての日本人の自己意識の誕生から現代まで

『古事記』にも記されたコメの持つ祭祀的な性質を手掛かりに、「外米」に対する敏感な感情と、コメの白さに自らの純粋さを重ね合わせてきた日本人の心性を明らかにするとともに、米食と水田というアジアに共通の要素を持ちながらコメをアイデンティティ確立の手段とした日本人の独自性が考察された。

- (11) 井上亘 (北京大学 [中国]) / 「倭」から「日本」へ：日本のアイデンティティとしての二つの国号

702年に国号が従来の「倭」から「日本」に変更された理由を、7世紀の白村江の戦いで敗れた日本が置かれた国際的な状況を通して検討するとともに、その後の歴史的な展開も踏まえることで、国号が古代においては外交上の対外的存在であったのが、中世以降になると国内を統括する政治的存在へと変質していったことが指摘された。

- (12) ヴィクトリア・エシュバッハ＝サポー (エバーハルト・カール大学テュービンゲン [ドイツ]) / 上田万年の国語と現代の日本語

上田万年が博言学から出発して「国語」の確立に寄与した歴史上の事実を通して、「国語」と国家の結び付き、言語とアイデンティティの関係、さらに、標準語の確立と日本人のアイデンティティのあり方が、定量的な側面から検討された。

- (13) 王敏 (法政大学 [日本]) / 禹王からみた日中および東アジアの文化関係—日本における禹王信仰の調査報告を通して—

現在日本全国に約60件あるとされている、禹の事跡を讀える禹王遺跡を対象とし、日本に「禹王伝説」がもたらされた経緯と普及の過程を検討す

るとともに、「禹王伝説」が後世に与えた影響、そして東アジアにおける日本の立場と東アジア諸国との関係の変化が議論された。

- (14) 安孫子信（法政大学 [日本]）／「哲学」は日本を東洋と西洋との間のどこに位置づけるのか—中江兆民・福沢諭吉・西周一

「日本に哲学なし」と唱えた中江兆民は、中国にも西洋にも‘世界観’としての哲学はあったとみなした。西洋哲学の真髓を‘自立心’に見た福沢諭吉は、この点では中国よりも日本のほうが西洋に近く、哲学にも近いと考えた。そして日本に文字通りに哲学を導入した西周一は、哲学ということで‘実証哲学’を考えており、その哲学は中国にも日本にも未だないとみなした。こうして、哲学は中江と福沢にとっては日中を分かちもの、西にとっては日中を結ぶものだったのであり、そこから西の日中の共同作業の場としての「哲学」の考えが生じたのである。

- (15) 星野勉（法政大学 [日本]）／近世日本思想における儒教の位置

近世初頭に起きた仏法の王法への従属、徳川幕藩体制になって統治原理として活用された朱子学の導入、それらの傾向への反発から、江戸時代の知識人たちが、儒教を変容させ、国学を登場させることで、精神的に儒教を克服しようとしたことが示された。さらに儒教がそうである外来思想受容排斥の中で、「日本意識」が形成されたことが示された。

- (16) 上垣外憲一（大妻女子大学 [日本]）／東亜における「唯識三十頌」の翻訳

世親が著した唯識の思想を要約した30の偈頌で、玄奘三蔵が漢訳した「唯識三十頌」を対象に、漢訳された「唯識三十頌」が東アジアの諸国にどのように伝播し、現在に至るまでいかなる影響を与えているかを、三島由紀夫の小説『豊饒の海』やダライ・ラマの教義、ベトナム仏教などを参考にしながら検討した。

- (17) 鈴木聖子（東京大学 [日本]）／パリ第7大学ドゥニ・ディドロ [フランス]）／

田辺尚雄の「東洋音楽理論ノ科学的研究」：1920年代の日本音楽研究

音楽学者の田辺尚雄は、朝鮮、台湾、アイヌ、沖縄の各地で行った在来音楽の研究を通して「日本音楽の起源」の探求を行ったことで知られるが、その過程が詳しく検証された。田辺は、こうして日本の音楽の起源を求めるとともに、八重山での調査結果から新日本音楽運動に連なる創作活動にも

取り組み、音楽を通した日本のアイデンティティの確立を試みたのである。
 (18) 宮本圭造 (法政大学 [日本]) / 能楽は日本固有の芸能か—能楽の起源をめぐる言説の変遷—

明治維新後に最大の支援者である幕府を失ったことで、能楽は衰退する可能性もあった。しかし、世阿弥の『風姿花伝』や江戸時代の儒学者たちがすでに行い、明治時代の久米邦武などがその後を追う「起源」に関する議論を通して、能楽は「日本意識の形成」や「アイデンティティの確立」に一定の役割を果たし続けてきた過程が詳しく考察された。

2.2 シンポジウムの成果と意義

日本はアジアの一員である。今回のシンポジウムでは、日本のアイデンティティの内面でアジアが占めている比重の問題、あるいは反対に、アジアの中に日本を置いた場合の日本のアイデンティティの問題が、思想、歴史、文学、芸術、社会、政治など多様な側面で、しかも内外の立場から、詳しく検討されていた。日本のアイデンティティをめぐる議論がとかく参照枠も明示されずに、「日本人論」や「日本論」といった閉じた形でなされがちであるのに対して、今回はアジアを軸として置いて吟味が行われ、問題が明確化されたという点で、大変有意義なものであったといえよう。

それでも、日本のアイデンティティとアジア（東アジアに限っても）とは多様な関係を結んでおり、問題も複雑である。ここで仮の整理を行えば問題はたとえば以下の様にまとめられよう。(a) 日本もその一員である東アジアの国々とどのような友好関係を、どのように創出していくのか、その創出力にこそ、日本のアイデンティティは発揮されていくであろうという問題（クライン、マランジャン）。(b) そもそもが文明の周縁に位置する日本文化のアイデンティティというのは、絶対的に独自であるという仕方では存在しえず、多くは他から学びつつ、比較的まれに他の側からの学びの対象ともなるという仕方でのみ存在するのであろうし、この後者の側面をこれまでどう生み出してきたのか、今後どう生み出していくのかという問題（湯、クライナー、大貫、井上、王、星野、上垣外、宮本）。(c) 特に近代日本が西洋から全的に学びつつ、他のアジアに対しては自身が学びの対象となるという捻れの中で、ア

アイデンティティはどのようなものであり得たのか、あり得るのかという問題（ペルティエ、鈴木、川田、エシュバッハ＝サボー、安孫子、鈴木）。(d) さらに最近においては、他のアジアに対しても自身が学びの対象になるということが終息しつつあり、そのときアイデンティティはもはや位置付く場所を持たなくなるのではないかという問題（ゲー、ベルトン）。これらの問題に、今後さらなる検討を加え、未来につながる「日本意識」や「日本のアイデンティティ」の姿形を表出させていかなければならない。

以上の学術的成果に加えて、2011年から始まったストラスブール大学日本学専攻の大学院修士課程の学生による聴講が今回も行われ、3日間の会期中に延べ40人以上に達したことも付言しておきたい。修士課程の段階から、自らが専攻する日本研究という分

野の最新の学問動向に触れることで、学ぶことに対する意欲形成が促進されることは有意義なことである。また、さらに、今回も日本研究に従事しない一般の方々の聴講があった。国際日本学シンポジウムは研究促進だけでなく、こうして研究活動の社会への還元という面でも、一定の役割を果たしているのである。

本学研究センターを構成する各研究所（国際日本学研究所・能楽研究所・沖縄文化研究所）の画像類、②研究成果を統合して国際的に活用してもらうためのデータ類、③国際日本学研究を進展させるための研究成果データベース類、④国際日本学研究者自体のデータベース類、の四つを想定し、そのすべてについて公開作業を実施してきた。

またこれらは研究所のサーバー上のシステムとしては、FileMaker系のデータベースと、NAMAZU系のデータベースとに分かれる。大まかに言って、画像を含むもの（または将来含む可能性のあるもの）が前者、テキストベースのデータが後者となっている。

コンテンツ①については、かつて日立製作所がサーバー内に設置した“Digital Library”というシステムによって公開してきたが、より利用しやすい形に変更するために、あらたに従来公開してきた個別JPEG画像を、高精度を保ったまま典籍毎にまとめることのできるPDFファイル群に変換して2009年中に法政大学図書館サーバー内に設置されたりポジトリに移管済みである。

なお能楽研究所所蔵資料については、冒頭部画像付き目録データベースもスタンドアロン版のFileMakerProをベースに制作したものを、ateruiサーバー上でFileMakerServer Advanced12（本年度11からバージョンアップした）を用いて変換して別途公開している。

コンテンツ②については、国際研究協力の成果の一つである「在ベルリン・吐魯番漢文世俗文書データベース」を構築、引き続き拡充している（当初の調査資金は小口を代表とする科研費による）。これはベルリン国立図書館やベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー、あるいはベルリン国立アジア芸術博物館などの施設に架蔵されている、中国西域の吐魯番出土の漢文世俗文書断片群を整理して、本来の書名を解明し、さらにはその全文テキストを精細な画像付で公開しようとするものである。これらの文書調査は吐魯番地域と同じく中国律令制を継受した日本古代史とも深い関係を持ち、さらにドイツとの国際的な協力によって成り立ったもので、国際日本学研究の一つの新しいモデルとなるものであった。

これまで画像は権利関係の問題があって公開できずにいたが、現在ではその問題もクリアされ、全点について新たに鮮明な画像を表示させるシステム

として再構築され運営中である。画像が重要な要素になっており、FileMakerベースで作業がなされている。

現在、登録文書数は826点。ただしさらなる拡充のためには、さらに新たな科研費による調査が必要で、現在模索中である。また精密なトレース図や全文デジタルテキストを順次、内部で蓄積し続けている。

コンテンツ③については、日本のなかの異文化の代表的存在である北方史分野を中心に、弥生時代以降、近世にいたるまでの時代を研究した文献を網羅し、柔軟に検索できるシステムを再構築して、それを世界に向けて公開することによって、国際日本学研究の進展に資する努力を続けている。さらにそれを拡充し、およそ日本古代史に関わる全ての研究についてのデータベースの構築にも入り（そのなかには「日本意識」研究に関するものも多数含まれている）、試験公開に成功し、引き続き拡充している。年度末時点での登録データ数（内部レベル）は、古代北方史関係研究文献目録データベースが20,859件、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベースが1,235件、近世アイヌ史関係研究文献目録データベース〔試行版〕が8,626件、日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース〔岩手県分・試行版〕が313件、日本古代史関係研究文献目録データベース〔試行版〕が208,665件である。なお既入力の個々のデータについても以前のを精査して相当の修正をほどこしている。

これらはすべてNAMAZUベースで作成されている。なお検索のための単語分割にはKAKASHIを用いているが、デフォルトの辞書をそのまま使うか、こちらで用意した歴史的専門用語の辞書を使うかで試行錯誤が続いているが、現時点ではデフォルト辞書で運営中である。

またこれらとは別に、北方世界特有の土器である続縄文土器の、後期のデータベース「後北式・北大式土器を中心とする遺跡・遺構・遺物データベース」を試験的に公開している。まだ実測図の公開許可を得る作業が続いているため、土器の図像自体は一般公開できないが（内部的には実装済）、土器に関する固有データはすべて公開されている。現時点では北海道と青森分546件を公開している。また遺跡の分布図も作成して研究の便宜を図っている。さらに北東北の続縄文土器について資料の蓄積中である。

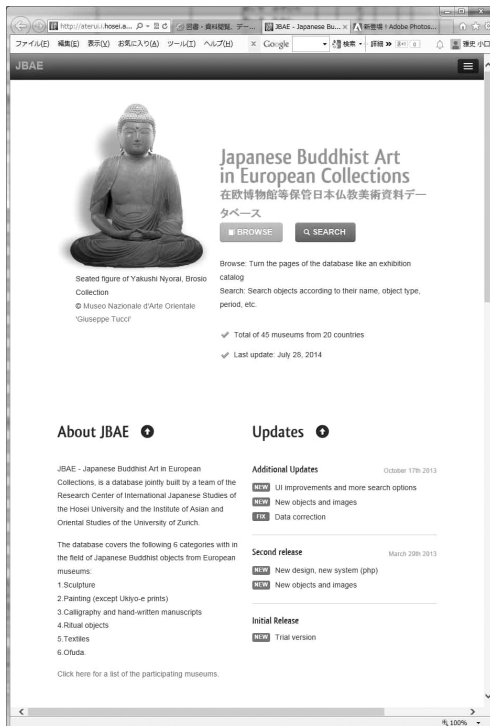
さらに内部の共同研究者のために、冒頭でも触れたように、NAS（Network

Attached Storage) によるデータの共有を継続的に実施している。現時点では主にアプローチ1と本電子図書館システムで利用されているが、大量のデータを電子的にここに保管しておくことによって、いつでも過去の研究に遡ることができ、それを踏まえての研究の前進が図られるように工夫されている。たとえば過去の研究会レジュメをすべて電子化して、内部のメンバーで共有したり、巨大な地図データをここにおいて、内部メンバーであれば自由に閲覧して研究素材として活用できるように配慮している。現時点では2010年以降開催の発表資料と収集日本古図の画像20点をアップロードしている。

コンテンツ④については、国際日本学研究会に從事している研究者のデータベースを構築することによって、世界のどこにどのような分野を対象としている研究が存在するのかを自由に検索できるようにした。これによって新たな国際協力による研究連携が可能になり、国際日本学研究会の進展を促進する準備を整えることができた。データ数は昨年と同様で1560件。ただし件数は同

じでも一部細かい改編が継続的になされている。このデータベースもFileMakerで作成されFileMakerServer Advanced12を通して公開されている。

なおこれらとは別に、2010年度から3年計画で採択された文部科学省(後に学振へ移管)「国際共同に基づく日本研究推進事業：欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究点」の調査成果を共有するためのデータベースも世界に向けて本格的公開運



用を開始した。画像を含むので FileMaker ベースで作業してきたが、今後の保守を考えて、データを PHP システムに移植して運用している。このデータベースもまた、日本意識解明のための有力な素材を今後とも提供していくことになる。現在のトップ画面を掲載するが、現状では、BROWSE ボタンを押すと総合カタログのように最初からパラパラと画像をめくっていく閲覧方式、特定のデータを検索するには SEARCH ボタンから入るという2形態に分けて設置されているが、前者については現在博物館を指定するなど、もう少し実用性を高める方策を検討している。